



今月はと畜場で時折見かける「豚丹毒」についてお話します。と畜場で発見されるのは主に以下の「蕁麻疹型」、「関節炎型」、「心内膜炎型」の3型です。豚丹毒菌は自然環境中に広く分布し、また、外見上健康な豚でも豚丹毒菌を保菌していることがあります。発症には高温・多湿・密飼等のストレスが影響するとされていますので、夏場の暑熱対策も大切です。

蕁麻疹型

皮膚に特徴的な**赤色の隆起した菱形や四角形の病変**がみられます。

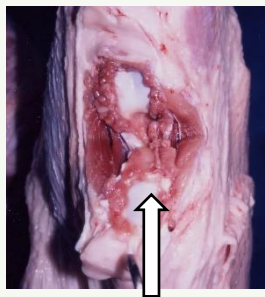
蕁麻疹型は農場でも発見でき、抗生物質治療可能ですので、**治療して休薬期間をしっかりと守って出荷しましょう。**

また、豚丹毒菌は人にも感染するので**病変に素手で触れない**ようにしましょう。



関節炎型

慢性型で四肢の関節に好発します。ほとんどが解体後の枝肉検査で発見されます。



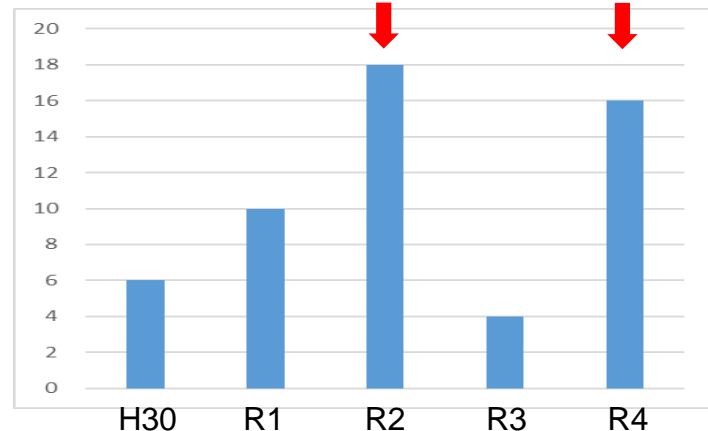
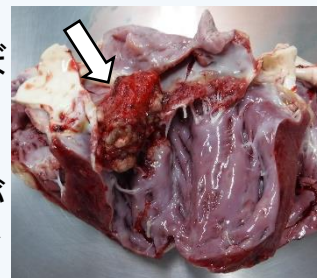
炎症が起こり、関節に毛のような突起(絨毛様組織)ができています

【過去5年の豚丹毒発生状況】

右のグラフは、長崎県(県立)の食肉衛生検査所のと畜検査における、豚丹毒の発生状況です。波がありますが、R2年度とR4年度は発生が増えています。

心内膜炎型

心臓の弁に**疣(いぼ)**を作ります。特徴的な臨床症状がみられないため、ほとんどが解体後の内臓検査で発見されます。



蕁麻疹型の発症の後に、同じ農場において、心内膜炎型や関節炎型などの慢性型の豚丹毒が続発することがあるので、注意が必要です。

いずれの型の豚丹毒でも全部廃棄やと殺禁止となり、もし豚丹毒菌が農場で蔓延すると大きな損失となります。もう一度、飼養衛生管理の徹底等の予防対策を確認されてはいかがでしょうか？